

March 2026

京都大学総合博物館 ニュースレター



パルテノン神殿模型（濱田耕作製作、1917年）＊2～3頁に関連記事

2025年度企画展「文化財発掘 XII：模型からみる文化遺産」.....	2
京都大学総合博物館レクチャーシリーズ（第167回）.....	4
定点カメラとぬいぐるみで高山の野生動物を守る	
子ども博物館だより〈10〉研究室を博物館に持ち出す	4
第20回科博連サイエンスフェスティバル	5
実物に触れ，感覚で理解する	
人文系院生，サイエンスフェスティバルに挑む	
総合博物館コレクション研究〈26〉日本最初の淡水魚モノグラフ	6
定年退職を迎えるにあたり：植物標本とともに	8
京都・大学ミュージアム連携合同展	10
京都の大学ミュージアム特集6「おくりもの」	
AED・イーバックチェア取扱講習会	10
研究資源アーカイブ通信〈35〉活動報告（2025年2月～2026年1月）.....	11
総合博物館日誌（2025年11月～2026年2月）.....	12

2025年度企画展 文化財発掘XII 模型からみる文化遺産

開催期間：2026年3月11日(水)～6月14日(日)

大学構内の埋蔵文化財を紹介してきたシリーズ「文化財発掘」の12回目は、総合博物館や文学部陳列館の片隅に眠っていた文化遺産の模型を「発掘」し、その学術的意味に焦点を当てる企画展として開催する。

考古学を学ぶために1913年3月に渡欧した濱田耕作は、ヨーロッパ各地の博物館・美術館を訪問し、考古学の研究・教育のために模型が用いられていることを知った。帰国して京都帝国大学文科大学考古学講座の担当を命じられた濱田は、パルテノン神殿の模型を自ら製作した。そして、日本・朝鮮・中国各地でおこなわれた調査研究と関連して、濱田は多くの模型を製作することになる。後に濱田は、「考古学的遺物の復原は、模型の製作に由って十分に試みられ、研究せらるべきであり、模型の効用は更に考古学の研究にも大なる領分を有することとなるのである」(『考古学関係資料模型図譜』1931年)と述べている。今回の企画展の第1部では、京都大学が所蔵する模型の展示を通して、濱田が自身の調査をおこなう中で、どのような模型を製作し、どのような研究を進めたのかを考えてみたい。



写真1：人物埴輪模型（木平愛次郎製作，1902年）



写真2：ストーンヘンジ模型（上野製作所寄贈，1927年）

展示第2部では、遺物模型が製作・収集された経緯に注目する。京都帝国大学の初代総長であった木下広次は、坪井正五郎に、東京帝国大学人類学教室が所蔵する人物埴輪・馬形埴輪の模造を依頼した〔写真1〕。また木下は、兵庫県雲部車塚古墳から出土した甲冑類の複製品と復元品を製作させた。これらの資料は、図書館に展示されていたが、後に陳列館で收藏されることになる。

その後、濱田は陳列館收藏資料をもとに模型を製作するとともに、他機関で製作された模型（複製品・復元品）の収集もおこなった。さらに島津製作所や上野製作所は、陳列館收藏資料を複製した模型を、教材として販売した。第2部では、いつ・だれが・どうやって・何のために、さまざまな遺物模型を製作したのかを概観したい。

そして第3部では、濱田が世界各地の遺跡模型を製作した背景に迫る。上野製作所が各種模型を製作していた頃、濱田は日本児童文庫の1冊として、『博物館』（アルス社、1929年）を執筆・刊行した。本書で濱田は、架空の「考古博物館」の展示を解説する形をとって、ヨーロッパ（旧石器時代室・新石器時代室）と日本・朝鮮・中国（日本先史時代室・日本原史時代室・朝鮮満洲の古墳室）の先史考古学を概説している。濱田が自ら描いたものを含む挿絵の中には、上野製作所の模型のモデルになった遺物・遺跡が少なからず含まれている〔写真2〕。濱田らが描いた挿絵と比較しながら、朝鮮の墳墓やヨーロッパの巨石記念物の模型を通して、濱田が構想した「考古博物館」に思いをはせていただきたい。

今回の企画展では、これまで存在は知られていながら、公開する機会のなかった模型を展示することができた。例えば、大阪府・奈良県各地に所在する天皇陵古墳の模型は、宮内省から秘密裏に入手した墳丘測量図をもとに、1936年に製作されたものである〔写真3〕。その後、墳丘測量図は公開され、航空写真や上空からのレーザー測量などによる研究が進んでいる。しかし、現在でもこれらの模型から読み取れる情報は少なくない。また、これらの模型を密かに製作した、当時の考古学研究室員の心情も想像していただきたい。

模型は本来の構造を復元したり、現地では観察できないさまざまな方向からの断面を示すことができる。これこそが遺跡の模型の大きな魅力である。横口部の閉塞方

法を検討するために製作された福岡県浦山古墳横口式石棺の模型や、封土の形状を検討するために製作された奈良県石舞台古墳模型が前者の例である〔写真4〕。後者の例としては、主室の二重構造や前室・耳室との関係を複数の方向から観察できる旅順（現・大連市旅順口区）近郊にあった宮城子2号墳模型などがあげられる。説明・写真・図面などでは伝えられない情報をもつこれらの模型は、それぞれの報告書に写真が掲載されている。しかし、写真よりも実物をみることで、模型製作の意義をより感じることができるだろう。

今回展示した模型の中には、現在は失われたもの、あるいは諸事情から原状を観察することが難しい遺跡・遺物があることにも注目していただきたい。旅順近郊にあった刁家屯五室塋墓^{ちようかんとん}は、1910年・12年に濱田の調査により4つの塋室が調査され、1917年の関東庁による調査で、もう1つの塋室が発見された。この時の調査は、破壊の危機にあった塋室を解体・移転することを目的としたものであったが、結局復元されることはなかったという。そのため、今回展示する模型は、この塋室の全容を立体的に理解するための唯一の手がかりなのである。また、慶州飾履塚から出土した飾履^{しよくり}の模型は、飾履の破片の接合関係を検討しつつ製作されたものである。飾履側板部は、現在、全形の復元が困難な状態になっていると聞く。そのため、この模型は、原資料を検討するための大きな手がかりとなっている。

原品を保存・維持することが困難であったために、精密な複製品が製作された例としてあげられるのが、奈良県唐古遺跡で出土した木製品模型である〔写真5〕。1937年の発掘調査当時、大量に出土した木製品を保存する技術はなかった。自然乾燥させたり水浸けにして保管したが、多くは変形・欠損してしまった。一方、石膏で型取りして製作された模型は、形状だけではなく、表面に残された加工痕跡なども忠実に残しており、現在でも研究対象として用いることができる。また、模型製作時の外型が残されており、模型の製作方法を具体的に知ることができる点が貴重である。今回は、東京帝室博物館で製作されたと思われる銅鏡・鹿角製刀装具の石膏模型も展示している。

私は今回の企画展の準備を進める中で、「千の言葉を列ねた説明も、一枚の写真図画には若かず、百の図画写真も遂に一個の模型に及ばない」という濱田耕作の言葉を何度も実感した。是非、展示を見学していただき、模型のもつ「威力」を味わっていただきたい。

（文学研究科 教授 吉井秀夫）



写真3：大仙古墳模型（考古学研究室製作，1936年）



写真4：石舞台古墳墳丘模型（荒谷芳雄製作，1936年）



写真5：木製高杯模型・型と原品
（唐古遺跡出土，荒谷芳雄製作，1937年頃）

京都大学総合博物館レクチャーシリーズ(第167回)

定点カメラとぬいぐるみで高山の野生動物を守る

開催日:2025年12月13日(土)

12月13日、京都大学総合博物館レクチャーシリーズNo.167にて、「野生動物を『まもる』とは?——世界で一番高いところに生息するネコ科動物・ユキヒョウを例に」というテーマで、木下こづえ先生(アジア・アフリカ地域研究研究科)から話題提供いただいた。会場には小さなお子さんから年輩の方まで幅広い年代の参加者が



ユキヒョウ ©twinstrust

集い、木下先生が過酷な高山での調査を軽やかに楽しそうに語る姿に引き込まれていた。

ユキヒョウの写真一枚を撮るために、植物すらほとんど生えない環境へ定点カメラを長期間設置する苦労や、ほとんど栄養にならない植物をネコ科らしく食べている謎も紹介された。イエネコの“草を食べる場面”がどのようなタイミングで起きるのかを知るために、研究協力者を募集しているというオープンサイエンスの呼びかけもあった。最後に絶滅危惧動物の生息環境を守っていくために、キャラクター制作や地域産品イベントなど、研究者の枠を超えてユキヒョウの保全に取り組む様々な活動が紹介された。活動の幅広さはユキヒョウ総合プロデューサーさながらの印象であるが、「フィールドで研究すること」の面白さと醍醐味がつまった内容で、参加者以外にも、もっとたくさんの来館者に知ってもらいたい講演でした。

(総合博物館 准教授 塩瀬隆之)

子ども博物館だより<10>

研究室を博物館に持ち出す

筆者は理学研究科化学専攻金相学研究室に所属している。子ども博物館に化学専攻から参加する学生は久しぶりだと聞いていたが、化学専攻の中でも金相学研究室からの参加はおそらく初めてと考えられるため、まずは研究室の紹介から始めたい。金相学とは、金属の組成や温度変化によって性質や状態がどのように変わるかを調べる学問である。当研究室では金相学を基盤としつつ、金属材料やセラミックス、さらに近年ペロブスカイト型太陽電池などで注目されている超セラミックスといった幅広い無機材料を合成し、その性質を調べている。

子ども博物館において自身の研究に関連した出し物を行うにあたり、無機材料の合成やその性質を調べる実験をそのまま展示に持ち込むことは容易でなかった。というのも、研究室での実験は極端な温度条件下で行われることが多いからである。材料合成では1000～1100℃の高温が一般的で、150℃程度で行う反応ですら「低温反応」と呼ばれる。一方、性質調べる際に極低温を用いる場合も多く、例えば磁石の上で浮上させる実験で有名である超伝導現象は-270℃近くまで冷却しなければ現れ

ないことも珍しくなく、-196℃より高い温度で現れる超伝導は「高温超伝導」と呼ばれている。博物館の資料保存や来館者の安全性を考慮すると、こうした温度条件は展示に適さないため、安全かつ研究内容と関連した実験に工夫する必要があった。

そこで選んだテーマが「南極石」である。南極石は約25℃という非常に低い温度で溶ける特徴をもつ。この性質を利用することで、物質が融解する様子や、冷却によって結晶が現れる過程を机の上でも観察してもらうことができる。原料も除湿剤と水だけで、危険な物質を用いていない点も展示に適していた。

展示を行っていると鉱物に興味をもつ来館者が多く、中には本物の南極の石を期待して訪れる方もいる。しかし、人工的に「石」を合成できると説明すると驚かれることが多く、その反応は展示者として大きな喜びである。無機材料が身の回りの電子機器を支えている現代において、このような切り口からでも化学に関心を持ってもらえれば幸いである。

(理学研究科 博士課程 中谷剛人)

第20回科博連サイエンスフェスティバル

実物に触れ, 感覚で理解する

開催日: 2026年2月1日(日)

京都市科学系博物館等連絡協議会（科博連）による科博連サイエンスフェスティバルに「子ども博物館」として出展しました。当館としては14年ぶりの参加となります。今回は、一緒に参加した大学院生3名と私で計4つのブースを出展しました。

私は「くらべてみよう！ どうぶつのかたち」という



「くらべてみよう！ どうぶつのかたち」の様子

タイトルで、立ち寄っていただいたお子さんや親御さんに、シカやクマの標本を見比べたり、実際に触っていただいたりしました。大切な標本ですが、破損や紛失がないよう注意と工夫をこらしつつ、一部は実物を手に取っていただきました。感覚から入ることで、少しでもモノや生き物への関心を広げるきっかけになれば、という願いがあったからです。それに子どもは、目の前にモノがあれば、話を聞くよりもまず触ってみたいくなるものだと思います。「ふわふわ」「すべすべする」「これ本物？」「クマってこんなに小さいの！？」「虫歯がある！」「ここがくつつくのか」等、素直な感想を聞くことができました。

隣の大学院生のブースでは、南極石という常温で溶ける鉱物の状態変化に目を輝かせて見入る参加者の姿が見られました。人文系の2人の出し物にもひっきりなしにお客さんが訪れている様子で、嬉しい悲鳴をあげている姿が印象的でした。

(総合博物館 助教 伊藤毅)

人文系院生, サイエンスフェスティバルに挑む

2月1日、京都市青少年科学センターでおこなわれた「第20回科博連サイエンスフェスティバル」に参加させていただいた。動物の骨や手回し発電といった、いかにも「サイエンス」なブースが立ち並ぶなか、子ども博物館からは、2名の人文系院生も出展させていただいた。

- ・宰川 玲「お地蔵さんについて知ろう」
「昔の船のお話聞いてみなはれ」
- ・横田直宏「絵を比べてみよう」



説明を熱心に聞く子どもたち

自然科学一色な館内の雰囲気一抹の不安を抱きつつ、企画開始。はじまってみると、子どもも大人も興味を持ってくださり、結果的には、両名とも声がかれてしまうぐらいに大盛況であった。

参加者からは、大学院生がブースを担当していることや人文学と自然科学が同居していることに対して、多くの興味関心が寄せられ、ぜひ総合博物館にもいってみたいという声が多く聞かれた。特に、他の出展者との交流は刺激的で、実りのある機会になったと感じる。

また、子ども博物館によく来ていただいている親子連れのみなさまとも多く再会した。そんな子ども達に対しても、新作を用意したり、普段とは違う説明をしたりして、また新しい切り口から研究の面白さを伝えることが出来たかと思う。

今回の参加を経て、多種多様な博物館、および、科学イベントを熱心にまわる親子連れが多いことを痛感した。京都の数ある博物館の一員として、単なる十数分の与太話に終わるのではなく、学問の楽しさを伝えられる話ができるように、気持ちを新たに頑張っていきたい。

(文学研究科 博士課程 宰川玲)

総合博物館コレクション研究〈26〉

日本最初の淡水魚モノグラフ

宮地傳三郎による未公表英文タイプ原稿

総合博物館の建物ができた時、生態学研究センター（旧大津臨湖実験所）から、川村多實二（1883–1964）関係の淡水生物標本と資料が移管された。川村は日本で初めて動物生態学の講座を京都大学で開き、淡水生物学の研究を大津臨湖実験所で始めた。その資料の中に“Fresh Water Fishes of Japan by Denzaburo Miyaji. Otsu Hydrobiological Station.”と記された英文タイプ原稿（TKUM MSS 2002/7x / 5-06）〔図1〕がある。作成の年号は記されていないが、引用されている一番新しい文献が1927年であることから考えると1927年か1928年に作成されたと考えて間違いない。執筆者は宮地傳三郎（1901–1988）で、『大津臨湖実験所五十年 その歴史と現状』（上野編，1964）に「昭和初年に宮地が日本産淡水魚のモノグラフを作成したが、その発表を保留し」とあり、それがこのタイプ原稿である。

宮地は1925年に東京帝国大学理学部動物学科を卒業して、京都帝国大学理学部の講師になり、川村が所長を務める大津臨湖実験所で日本各地の湖沼の底生動物（ベントス）の研究を始めた。1928年から1940年に60報を超える論文を書いており、1938年からは海の内湾の底生動物の研究が加わった。内湾に関する論文は1955年までに20報を超え、底生動物相の分析で示した「宮地の内湾度」はよく知られている。1943年に川村の後を継いで動物生態学研究室の教授となり、戦後は内湾の藻場、沿岸魚の生態、アユ、ニホンザルなどのテーマごとにグループ研究を行った。岩波新書の『サルの話』と『アユの話』は、グループ研究の成果であり、一般によく読まれてきた。

各地の湖沼のベントスの調査を行っていたころ、宮地は「日本中の湖沼の底生動物の研究に熱中しておられ、野外と研究室をピストン往復しておられた。野外へ出動されるときには、文字通り山が動くような大きなリュックサックを背負って出かけられ、やがて風のようにまい戻ってこられると、日曜日も祭日もなく採集品の調べが続き、やがて結果をまとめるタイプライターの音が雨が降るように鳴り響く。ある日その音が鳴りやむと、早くも次の調査のためのリュックサックがふくらんでいった」と、森主一（1973）が記している。このころの宮地のベントス調査の野帳は総合博物館に保管されている。

宮地の未公表モノグラフの作成が1927年か1928年だとすると、臨湖実験所に着任した1925年に、まず、魚類の研究から始めたと思われる。そして、ほぼ3年で日本産淡水魚類のモノグラフを書き上げた。このモノグラフはどのようなものか。157ページ、2綱11目27科76属123種について、各種の学名、和名、形態的特徴、生息場所、近縁種との比較も書かれている。各種は線画で全形図が示され、「size 3/4」とか「natural size」と記されており、標本から作図されたことがわかる。部分図もあり、同様にサイズの記述がある。クニマスの記載〔図2〕を例にとると、雄の全形図（Size: 2/7）が示され、田沢湖固有でベニザケ由来のコカニーと記され、同じくベニザケ由来のコカニーであるヒメマスとの識別点（鰓耙数と幽門垂数）が検索表に記されている。*Oncorhynchus* 属（サケ属）は10種を挙げてJordan and Hubbs (1925) に準拠して *Hypsifario* 亜属と *Oncorhynchus* 亜属に分けている。その主な形質に鰓耙の特徴を用い、クニマスとビワマス（マスとして）の図が並んで示されている〔図3〕。科ごとに属への検索、属ごとに種への検索が示されており、採集した魚類がどのような種かを調べられるように配慮されている。本文の末尾に淡水魚類相の地理的分布を、地方の特徴、導入種、緯度による分布の特徴、生息場所の生態的特徴を、各地それぞれの種数の項目で記している。ふたつの綱に分けられており、現在の分類では囊鰓綱は円口類（メタウナギ類とヤツメウナギ類）、真口綱は硬骨魚類である。

川村は1918年に『日本淡水生物学上下巻』を著わしており、上巻は淡水藻類と淡水無脊椎動物の分類が記さ

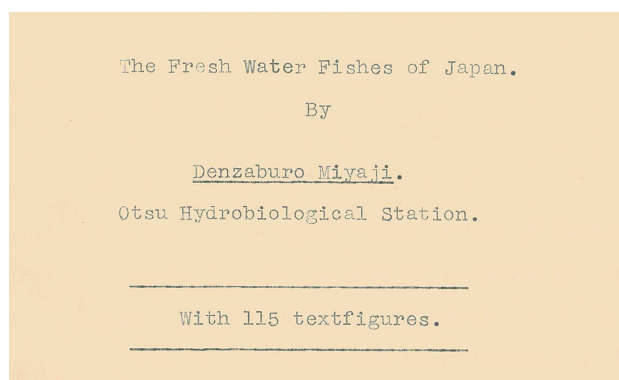


図1：タイプ原稿のタイトルと表紙

れ、下巻は魚類を含む淡水生物の生理・生態・分布が記されている。しかし、淡水魚類の分類には触れられていなかった。川村の淡水生物学の研究方針は、どこにどういものが生息しているか、つまり、生物相を明らかにすることが基礎となっているが、当時は日本の淡水生物相のすべてが明らかにされていなかった。

この時代、日本では魚類は同じ種が地方によって呼び名がちまちまちであり、学術的に魚類の種を論じるためには地方名を標準和名一つで呼べるようにする必要があった。それに取り組んでいたのは田中茂穂(1878–1974)であった。東京帝国大学動物学教室に在籍し、1911年から『日本産魚類図説』の刊行に着手して、1930年で48巻に至り、190図版、41新種を含む287種類を記載している。この図説の各巻の奥付に、各地にいる魚類に興味をもっている人々へのメッセージが載っている。わからない魚類がいれば、地方の呼称をつけて2個体の送付してくれば、うち1個体を返送して、その魚の学名を教えます、と書かれている。これによって、田中は各地の魚類標本と地方名を収集して、日本産魚類各種の名称を標準和名に統一し、その学名を設定していった。この『図説』に掲載された魚種は標準和名と学名に加えて、地方名が記されている。そして1931年に一般向けに『原色日本魚類図鑑』を出版した。これで、ようやく学名と標準和名を用いて、和文で魚類についての論文や学術記事が理解されるようになった。宮地が淡水魚のモノグラフを編んでいたのは日本産魚類の、このような時代であった。

淡水魚のモノグラフは『日本の淡水魚類』(岡田・中村, 1948)が最初であるが、宮地のモノグラフは、これに先立つこと約20年であり、出版されていれば、日本で最初の淡水魚のモノグラフであった。岡田・中村の著書と違って、宮地のモノグラフは末尾に各種の生態学的特性が意識されており、川村研究室の雰囲気がよく出ている。宮地は東大の動物学教室での卒業論文はドジョウの皮膚感覚器官であり、指導教官は田中茂穂であった。このモノグラフの謝辞に名前が記されていることと、引用されている文献をみても、作成に当たって魚類の分類について田中からかなりの指導を受けたと思われる。

リンネ式分類体系によって日本で初めて『Catalogue of Japanese Fishes 日本魚類目録』を編んだのは内村鑑三であった(内村, 1981)。そして、淡水魚だけにしぼった“Fresh Water Fishes of Japan”を編んだのは宮地傳三郎であった。いずれも未公表原稿で、内村の魚類目録は推定1883～1893年頃で日本の水産学の黎明期だった。そして、宮地のモノグラフは推定1927年か1928年で、日本の淡水生物学の研究が始められたころであった。

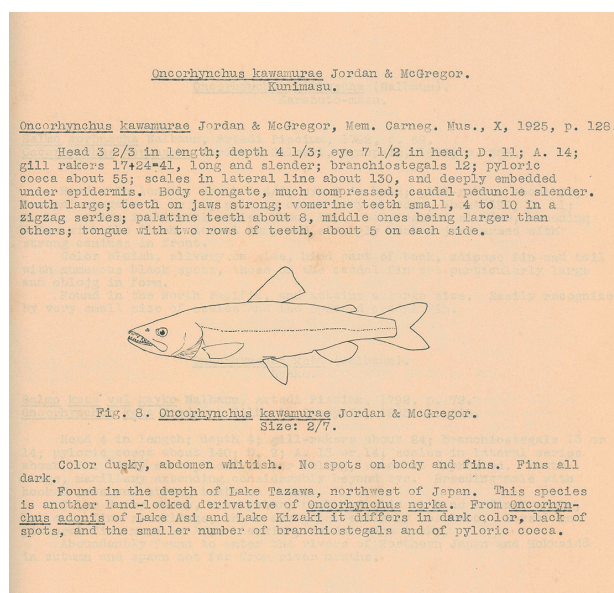


図2：クニマスの記載 (P. 22)

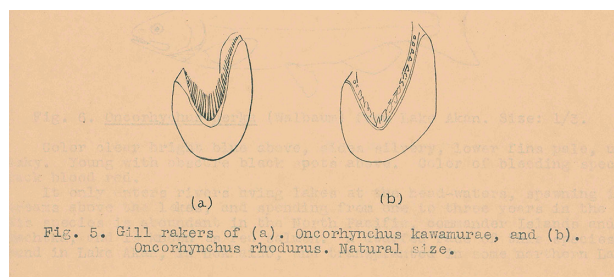


図3：クニマスとビワマスの鰓耙 (P. 19)

本稿をまとめるにあたり、資料の撮影などで、本学の講師五島敏芳氏と教務補佐員上羽真弓氏にご面倒をおかけした。記して謝意を表したい。

(京都大学名誉教授 中坊徹次)

参考文献

- Jordan, D. S. and C. L. Hubbs. 1925. Record of fishes obtained by David Starr Jordan in Japan, 1922. Mem. Carnegie Mus., 10(2).
 川村多實二. 1918. 日本淡水生物学. 裳華房, 東京.
 宮地伝三郎. 1973. 宮地伝三郎動物記第5巻. 筑摩書房, 東京.
 宮地伝三郎. 1980. 生物学の視座から. 人文書院, 京都.
 森主一. 1973. 宮地先生の思い出. 宮地伝三郎動物記第5巻月報.
 岡田彌一郎・中村守純. 1948. 日本の淡水魚類. 日本出版社, 大阪.
 大串龍一. 1992. 日本の生態学 今西錦司とその周辺. 東海大学出版会, 東京.
 田中茂穂. 1911–1930. 日本産魚類図説 1–48巻. 丸屋・丸善, 東京.
 田中茂穂. 1931. 原色日本魚類図鑑. 大地書院, 東京.
 内村鑑三. 1981. Catalogue of Japanese Fishes 日本魚類目録. In 内村鑑三全集 1. 岩波書店, 東京.
 上野益三編. 1964. 大津臨湖実験所五十年 その歴史と現状. 京都大学理学部附属大津臨湖実験所, 大津.

定年退職を迎えるにあたり 植物標本とともに

1980年に京都大学に入学してから46年、この3月に定年退職を迎えることとなった。学生時代そして教員として働くあいだ、ずっと関わり続けてきた植物標本について語ってみたい。

植物標本庫の存在を知り採集に明け暮れる

もともと私は分子遺伝学に興味があつて京都大学の理学部に進み、教養部のあいだは別のこともやってみようと漠然と思っていた。一回生のとき自主ゼミとしていろいろな専門書を一緒に読んでいた大学の同級生に強く誘われ、春休みに沖縄を訪れることになったのだが、初めて見る亜熱帯の動植物がおもしろく、爬虫類を採りまくる友人を横目に私は植物標本を集めてみることにしたのだった。

沖縄は日本に復帰して間もなく、よい図鑑や当然インターネットもまだない。すぐに同定に困った私は、すでに理学部の研究室に出入りしていたその友人の紹介で理学部の植物分類学の研究室に通うようになった。研究室の横には当時すでに100万点を超える標本が整然と並ぶ標本室があり、私は沖縄で採集した標本の学名を、文字だけの植物誌でまず見当をつけ、標本室に入って実物と合わせて同定するという作業に没頭した。分類学という学問がまだ存在していること、そしてその根拠となる膨大な標本を収めた標本庫（ハーバリウム）の意義を実感したのである。

いつの間にか「分類」の世界にどっぷりとはまった私は足抜けができなくなり、その後を植物標本とともに過ごすことになる。4回生のときには屋久島原生環境保全地域調査に参加、また与那国島から北上して奄美大島まで研究室の先輩と1ヶ月にわたる採集旅行を行い、亜熱帯地域の植物に魅せられた。

大学院時代にはタイへ3ヶ月間の調査に連れて行ってもらい大量の植物標本を採集したが、低地の乾燥植生は思っていたより単純、高地の照葉樹林はどこかおなじみで少しがっかりしたことを覚えている。調査終了後、私は当時研究対象としていた熱帯の植物の標本を見せてもらうため、一人でバンコクから鉄道でシンガポールへ向かった。シンガポール植物園のハーバリウムで文献に引用された貴重な標本を見せてもらい、論文と証拠標本を合わせたときに見えてくるおもしろさを再確認した。そして閲覧にあたり、管理者から「あなたは研究者として来たのか、採集家として来

たのか」とまず聞かれたことが強く印象に残った。

タイは乾期でまったく雨が降らなかったのに、マレー半島を南下すると雨が多くなって植生がすっかり熱帯雨林に変わり、ところによっては洪水となっていた。照葉樹林とはまったく異なる熱帯雨林に「これだ」と感動して、その後、インドネシアのスマトラ島、アンダラス大学の研究員として長期で滞在することになる。この西スマトラ州でも植物調査を行い、採集した標本はインドネシア、オランダ、アメリカ、そして京都大学のハーバリウムに納めた。この時アンダラス大学に今も残る小さなハーバリウムを整備したことも思い出である。

標本の管理者となる

スマトラの植物はおもしろく採集は楽しかったが、文献も標本も乏しく、このままではめざしていた研究者ではなく採集家になってしまうことに危機感を感じていたところ、京都大学の教養部で助手の公募が出ていることを知った。スマトラから応募すると、おもしろがられたのか採用され、帰国して京都大学の教員としての人生が始まった。

教養部にも第三高等学校に始まる小さなハーバリウムがあり、私の研究室はその隣にあつて、その標本の管理も担当することになった。その頃、理学部でも標本の管理を担当していた教員の異動・退職があり、その手伝いのため私が教養部からときどき理学部のハーバリウムにでかけることが必要となった。理学部のハーバリウムは日本でも代表的なものの一つで、国内外からの収蔵標本に関する問合せ、閲覧の申し込み、借用や貸出標本の対応がかなり多い。その他、収集や交換などで新しい標本が届くと、貼り付けによる標本の作製と適切な配架が必要であり、この仕事は終わることがない。標本の管理に責任を持つキュレーターとなったのである。

総合博物館へ

当時、どこの標本庫も資金難と管理状況の悪化に悩まされていた。京都大学の植物標本も雨漏りのする収蔵室でブルーシートをかけられた標本棚の写真が、ある週刊誌に掲載され話題となったこともある。京都大学では自然史博物館の設置を目指し、理学部・農学部・教養部合同調査委員会による検討が始まっており、私も教養部（のちに総合人間学部）の教員としてこの委員会に加わっていた。その後、

1996年には学術審議会から「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」という中間報告が出され、それを受けたかたちで1997年に総合博物館が設置された。そして全学の資料を博物館に集約し一元管理を目指すことになった。この新設に伴い、私は総合博物館の助教授として異動した。

収蔵室のデザイン

部局としての総合博物館は設置されたものの、収蔵・展示のための施設はすぐにはできなかったが、2000年になって現在の南館が竣工した。標本の適切な収蔵のため、温湿度環境、消火、燻蒸、標本棚などの設備を一から考え、デザインできたことは、たいへんではあったがやりがいのある仕事だった。学生時代から自分の研究のために国内外の数多くの植物標本館を訪れた経験を、ある程度活かすことができたと思っている。

2000年12月から2001年3月にかけて、全学から自然史・技術史資料の搬入を行い、私がその移転の責任者を任された。植物標本については理学部、農学部、薬学部などからおおよそ140万点の標本資料を受け入れた。理学部からの標本の受入については学生の協力を得て約3ヶ月を事前準備に費やし、移転による閲覧できない期間を2週間に留めることができたことは自慢の一つである。

総合博物館としての大学博物館

大学博物館の設置が求められた要因の一つは、個々の研究室や部局が、永年にわたり集積し続けた標本資料の管理コストに耐えられなくなったことである。しかし研究室にとって重要なコレクションであるからこそ、その標本資料を他部局である総合博物館に移すとなれば、当然さまざまな問題が引き起こされることになる。

2012年10月、JSPS ロンドンの企画によりイギリスのイースト・アングリア大学で、「Discovery, Display and Debate: New Agendas for University Museums」と題するシンポジウムが開催された。京都大学総合博物館からも私を含む4名が招待されたのだが、日本における「総合」博物館がうまく行くのかどうか、参加者から多くの質問があった。そこでは、さまざまな分野の標本を集約して一元管理することは別の視点からの利用また分野横断的な利用を促進できるが、研究者と標本資料との距離の拡大が大きく懸念されていた。また大学博物館「群」として異なる形態をもつ国立台湾大学との数度にわたるシンポジウムを通じて、私はこの問題を制度として解決する必要を強く感じていた。

資料部——全学的な資料管理と利活用

2016年、総合博物館に資料部を置くこととなった。総合

博物館が収蔵するさまざまな標本資料を文化史・自然史・技術史・研究資源の4部門9分野として管理体制を整え、全学の関連する分野の教員を各分野に連携教員として迎え、共同で管理・運用を行うという体制を整えることにしたのである。植物分野では標本を移管した理学研究科、人間・環境学研究科、薬学研究科などの教員に加わってもらい、標本に関するさまざまな情報を共有しつつ、利用促進を図っている。とくに植物標本の配架などについても協力していただいており、人手の少ない総合博物館としては大いに助かっている。

やり残した仕事

コンピュータ技術の進歩とインターネットの拡大により、標本を巡る環境は大きく変化した。古い文献資料や標本資料をインターネット上で確認することはすでにあたりまえのことになっている。残念ながら京都大学総合博物館ではこの分野で大きく遅れをとっている。多くの重要なコレクションを有する植物分野でも、国内外からデータベースと標本の画像提供への期待は大きい。私も何度も挑戦したものの、残念ながら在職中にかたちにすることができなかった。館全体の問題として今後、取り組んでいただきたいと思っている。

2024年10月、講演を頼まれ世界最古の大学といわれるボローニャ大学を訪れる機会があった。この大学もBologna University Museum Network (Sistema Museale di Ateneo) として11の博物館が連携する形態をとっている。構成する博物館のいくつかを見学させてもらったが、ハーバリウムで16世紀の博物学者Aldrovandiの植物標本（世界最古のコレクションの一つ）を間近に見る機会を得たのはほんとうにうれしいことであった。

（総合博物館 教授 永益英敏）



Aldrovandiの標本とキュレーターのMossetti氏
(2024年、ボローニャ大学植物標本館)

京都・大学ミュージアム連携合同展

京都の大学ミュージアム特集 6「おくりもの」

開催期間：2026年1月23日（金）～3月1日（日）

京都・大学ミュージアム連携（以下、連携）は、当館も参加する、京都に所在する大学博物館の連携組織です。2026年現在、16の大学にある17の博物館が連携に参加しています。1月23日から3月1日にかけて、みやこめっせ地下1階 WEST SQUARE Window Gallery にて、京都伝統産業ミュージアムを主催とした連携加盟館の合同展が開催されました。

今回の合同展は、「おくりもの」がテーマでした。当館からは、ゾウの化石1点を出品しました。これは、1918（大正7）年に京都帝国大学工科大学の比企忠博士に寄贈されたもので、兵庫県明石市沖合の海底から見つかったものです。瀬戸内海は氷期には陸地でした。かつてそこに暮らした様々な動物の化石が、しばしば底引き網などにひっかって引き上げられることがあります。これもそのようにして発見されたものでしょう。化石は頭骨の一部であって、上あごの臼歯や、かつて2本の大きなキバが生えていた穴を明瞭に観察することのできる、大変保存状態の良い化石です〔写真1〕。海の底か

らの「おくりもの」と言うことができるでしょう。

他の連携加盟館からも、芸術作品や考古学資料など、さまざまな切り口から見た「おくりもの」が出品されました。多彩な分野の展示物が結集した、見ごたえのある展示となりました。

（総合博物館 准教授 佐々木智彦）



写真1：ゾウ化石（上顎骨を口腔内から見ている）

AED・イーバックチェア取扱講習会

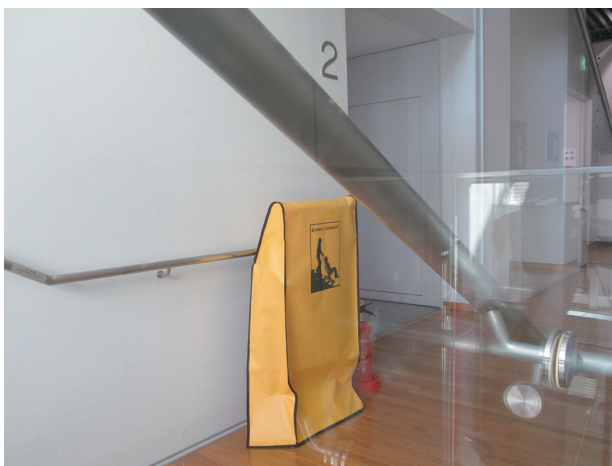
開催日：2025年12月4日（木）

イーバックチェアは、2024年3月より当館南館2階の階段前に設置されている。学生総合支援機構障害学生支援部門の非常時アシスト・トライアル（非常事態が発生した場合、障害等の状況によっては、その場の環境や状況に応じて必要なアシストや優先順位が変わる可能性がある。周囲の人たちが取り得る行動や選択肢をあらかじめ考え、様々な方法や状況を想定したアシスト・トライアルを行うことが有効と考えられる）の企画を館内で実施していただいたことが発端となった。災害時の来館者等の避難を想定して、様々なトライアルを行い、自分のできることや難しいことがある、トライアルで用いたような避難道具が大学内や街中のどこに設置されているか日常的に意識するようになる等、多くの気づきがあった。そして、館内にイーバックチェアが設置された。

2025年12月4日には、京都市消防局左京消防署鹿ヶ谷消防出張所、コーケンメディカル（株）のご協力をいただき、正面玄関に設置されているAEDとともにイー

バックチェアの取扱い講習を開催し、来館者を迎える当館にとって、非常時に一人ひとりが自分に何ができるのかを考える貴重な機会となった。

（総合博物館 事務部 松尾由美）



館内のイーバックチェア

研究資源アーカイブ通信〈35〉

活動報告(2025年2月～2026年1月)

2024年度

3月6日：研究資源アーカイブ運営委員会(第28回)開催(次年度事業検討, 研究資源化プロジェクト2件新規採択, 3件継続)

3月10日：桑野梓「茨木キリシタン遺物からみる『発見』とその後」(マルタン・ノゲラ・ラモス, 平岡隆二編『関西の隠れキリシタン発見——茨木山間部の信仰と遺物を追って』)に, 「京都大学総合博物館蔵キリシタン関係資料, ca. 1920–2004」画像提供

3月18日：蜷川順子「澤田美喜記念館蔵〈ご聖体の連禱と黙想の図〉について」(『関西大学 文学論集』第74巻第4号)に, 「京都大学総合博物館蔵キリシタン関係資料, ca. 1920–2004」画像提供

3月28日：『京都大学総合博物館ニュースレター』第63号に, 「研究資源アーカイブ通信〈32〉活動報告(2024年2月～2025年1月)」掲載

2025年度

4月8日：『「近畿地方の民俗学的調査」映像資料, 1933–1936』と『「近畿地方ヲ中心トスル民俗調査」録音資料, 1940–1943』公開



4月10日：環境省「京都御苑アーカイブ」と京都大学デジタルアーカイブシステム(Peek)が連携し, コレクションデータ及びリンク情報提供

6月10日：前田潤『タイムスリップ・ツーリズム——古代の飛鳥・江戸の吉原・大正末期の湘南へ, 現実逃避ぶらり旅』に, 「京都大学考古学研究室写真：阿武山古墳調査, 1934, 1987」画像提供

7月7～11日：東京文化財研究所に

て「博物館・美術館等保存担当学芸員研修(上級コース)」受講(上羽)

7月9日：研究資源アーカイブ運営委員会(第29回)開催

7月12日：「蹴上浄水場」(関西のモダン建築)に, 「増田友也建築設計関係資料, 1930–1984(主年代1950–1981)」画像提供

7月17日：防災研究所にて調査



7月20日：田路貴浩「建築アーカイブの現在19：増田友也建築設計関係資料」(『建築雑誌』第140集第1803号)に, 「増田友也建築設計関係資料, 1930–1984(主年代1950–1981)」画像提供

8月1日：茨木市生涯学習情報誌『NextStage』(第25号)に, 「京都大学総合博物館蔵キリシタン関係資料, ca. 1920–2004」画像提供

9月1, 4日：2026年度実施分「研究資源化プロジェクト」説明相談会(オンライン)開催

9月5日：『京都大学総合博物館ニュースレター』第64号に, 齋藤歩「研究資源アーカイブ通信〈33〉アーカイブズの整理技法に関するノート(2)——容器リストとプロジェクト索引の作成」掲載

9月22日：島根県邑南町日貫公民館に, 「「近畿地方ヲ中心トスル民俗調査」録音資料, 1940–1943」録音資料提供

10月14日：農学研究科にて調査

10月15日：業務システム利用説明会開始



10月21日：数理解析研究所にて調査

10月30日：スティーヴン・イッサーリス『バッハ 無伴奏チェロ組曲——秘められた〈物語〉を読む』に, 「京都大学総合博物館蔵キリシタン関係資料, ca. 1920–2004」画像提供

10月31日：入山洋子「まなざしの航路——西田直二郎, アドリア海からギリシャ・中東世界への旅」(『季刊民族学』第194号)に, 「「近畿地方の民俗学的調査」映像資料, 1933–1936」画像提供



11月30日：三月映像工作室『回頭一望(“Sakakiv”)：台湾南部林業史』に, 「京都大学演習林関係資料, 1928–1986」画像提供

12月15日：バク・アリム『韓国の教会美術——1890–1960年代のカトリック美術を中心に』に, 「京都大学総合博物館蔵キリシタン関係資料, ca. 1920–2004」画像提供

12月25日：『京都大学総合博物館ニュースレター』第65号に, 上羽真弓「研究資源アーカイブ通信〈34〉『博物館・美術館等保存担当学芸員研修(上級コース)』に参加して」掲載

2026年1月31日：牟田口章人「大織冠考——大阪の史跡・阿武山古墳棺内染織について」(『国際服飾学会誌』第68号)に, 「京都大学考古学研究室写真：阿武山古墳調査, 1934, 1987」画像提供

(総合博物館 事務補佐員 内山美喜子)

総合博物館日誌 (2025年11月～2026年2月)

子ども博物館 (活動報告)

実施回数: 14回

参加者数: 子ども194人/中高生5人/大人235人

スタッフ (のべ): 59人

レクチャーシリーズ

第166回: 核融合発電への挑戦——プラズマ乱流

2025年11月8日(土)

・金史良 (京都大学エネルギー理工学研究所)

第167回: 野生動物を「まもる」とは?——世界で一番高いところに生息するネコ科動物・ユキヒョウを例に

2025年12月13日(土)

・木下こづえ (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

総合博物館セミナー

第138回: ベトナム北部の高山地帯における爬虫両生類の多様性と新発見

2025年11月14日(金) 16:30～18:00

・Nguyen Thien TAO (ベトナム科学技術院生物学研究所・主任研究員)

第139回: 自然史常設展示 (植物) の展示ガイド

2026年1月15日(木) 12:30～13:00

・永益英敏 (京都大学総合博物館)

イベント

第20回京都大学ホームカミングデイ

観覧料無料

2025年11月1日(土)

*終了後に一部イベントをオンデマンド配信

京都千年天文学街道 第46回アストロトーク

2025年11月1日(土)

主催: 認定NPO法人花山星空ネットワーク

共催: 京都大学大学院理学研究科附属天文台、
京都大学総合博物館

大地は語る展 2025 足もとに眠る物語

2025年11月15日(土)

*展示・体験コーナー、講演

主催: 大地は語る展 2025 実行委員会

共催: 京都大学総合博物館

協力イベント等

関西文化の日

観覧料無料

2025年11月15日(土)・16日(日)

京都市留学生優待プログラム

「留学生おこしやす PASS」

2026年1月1日(木)～2月28日(土)

第29回京都ミュージアムロード

2026年1月21日(水)～3月15日(日)

京都マラソン 2026

2026年2月15日(日)

展示協力 (学術標本資料の貸出)

彦根城博物館 (1点)

「企画展 彦根藩儒学の胎動

——新たな学びの18世紀」

2025年11月8日(土)～12月7日(日)

諫早市 (4点)

「企画展 有喜貝塚発掘100周年 諫早の縄文展」

2025年11月29日(土)～2026年1月18日(日)

京都伝統産業ミュージアム (1点)

「京都・大学ミュージアム連携

京都の大学ミュージアム特集 6: おくりもの」

2026年1月23(金)～3月1日(日)

共催・企画: 京都大学総合博物館

入館者数

8,479人 (うち特別観覧: 21団体/634人)

京都大学総合博物館ニュースレター ISSN 2758-0784

第66号 2026年3月27日発行

編集・発行: 京都大学総合博物館

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

電話: 075-753-3272 FAX: 075-753-3277

E-mail info@inet.museum.kyoto-u.ac.jp

https://www.museum.kyoto-u.ac.jp/

*ニュースレターは、京都大学学術情報リポジトリ KURENAI でも公開しております。